

社 会 科

社会科部 樋口 晃 井出 悠介

研究協力者 宮崎 沙織 齋藤 周 関戸 明子

Ⅰ 社会科における「社会に変革を起こす子ども」について

社会的事象の問題に対する他者の考えや根拠を質的に向上できるよう働きかける子ども

この際、他者から社会的事象の事実や考え、その根拠を伝えられ、それらに納得する必要がある。

本校では、子どもたちが、将来「社会に変革を起こす」ことで、ともによりよく生きていくことのできる社会を創造できるようになることを目指している。「社会に変革を起こす」とは、自分も他者も納得しながら、現在の社会の中にある課題に対する解決策を見いだして実践していくことである。ともによりよく生きていくことのできる社会を創造していくためには、社会科を学ぶ本質的な意義である、「社会生活における人の営みやその価値を認識し、それを基に社会に生きる多くの人々が公正で平和に生活できるような、自らと社会との関わり方を見いだす」ことが欠かせない。なぜなら、自らと社会との関わり方を見いだすことは、社会的事象を多角的に考察したり、複数の意見を踏まえて選択・判断したりすることが必要不可欠であり、その中で、社会的事象に対する転移可能な概念的知識を得たり、考えや根拠への解釈の違いに対する納得解を見いだしたりして、成長できるからである。そして、それは、自他の人格を尊重し、公正な判断をする中で、ともによりよく生きていくことのできる社会を創造していくことと重なる。

本校社会科では、「社会に変革を起こす子ども」を「**社会的事象の問題に対する他者の考えや根拠を質的に向上できるよう働きかける子ども**」とした。考えや根拠を質的に向上するとは、他者から伝えられた社会的事象の事実や考え、その根拠に納得し、考えや根拠への解釈を広げることである。社会科の問題解決的な学習において、子どもたちは、様々な社会的事象と出会い、その社会的事象に対しての学習問題をつかむ。そして、その学習問題への予想をもち、予想の検証に向けて一単位時間ごとに資料を活用して具体的知識を得ていく。単元の終末には、この具体的知識を基に、転移可能な概念的知識を得たり、自らと社会との関わり方を見いだしたりしていく。このような問題解決的な学習の中で、社会的事象の事実や考え、その根拠を視覚化して伝え、他者の考えや根拠を質的に向上させる姿が見られた。このように、子どもたちが、自らの考えや根拠を質的に向上するには、社会的事象の問題に対する事実や考え、その根拠を伝えられた子どもが、それらに納得する必要がある。そのことが、考えや根拠への解釈の違いに対する納得解を見いだしながら、転移可能な概念的知識を得ることや、社会的事象を多角的に考察したり、複数の意見を踏まえて選択・判断したりして、自らと社会との関わり方を客観的な視点をもって捉えることにつながる。これらの



＜図Ⅰ 「社会科における社会に変革を起こす子ども」のイメージ＞

ことから本校社会科では、社会に変革を起こす子どもを、「**社会的事象の問題に対する他者の考えや根拠を質的に向上できるよう働きかける子ども**」とした。

2 研究の方向

Ⅰ年次研究では、社会科における「社会に変革を起こす子ども」の姿が現れる要因を情報活用の視点から明らかにし、その要因を基にICT活用による学習指導の工夫を以下のように考察した。

情報活用の視点からの要因

- ・資料から問題解決に必要な情報を取り出すことができる。【情報の収集】
- ・「調べた事実」「他者の考えや根拠」「社会科での既習事項」「他教科での学習経験」「生活経験」などの情報を活用できる。【情報の関連付け】

ICT活用による学習指導の工夫

- ・自他の考えや根拠を視覚化して伝えることを支援する学習シートの用意
- ・自他の考えや根拠を共有する機会の設定

実践から、自他の考えや根拠の視覚化と共有が容易になったことで、子どもたちは自他の考えや根拠の共通点や相違点を見だし、新たな事実や考え、その根拠を伝える姿が見られた。その際、それらを伝えられた子どもは、社会的事象の問題に対する考えや根拠を質的に向上させていた。

一方で、自らの考えや根拠を伝えることなく、他者の考えや根拠を聞くだけにとどまってしまう姿があった。この姿は、他者の問題に対する考えや根拠を質的に向上できるよう働きかけることができていない姿であった。このことから、「社会に変革を起こす子ども」の姿がさらに現れるように、課題となる姿を分析して、研究を進めていくこととした。

3 研究内容

(Ⅰ) 社会科で重視する非認知的能力

Ⅰ年次研究を進めていく中で見られた「社会に変革を起こす子ども」に関わる課題となる姿を分析する。分析を進めるにあたり、全体研究を受け、まずOECDの示す非認知的能力の3つの分類である「目標の達成」「他者との協働」「情動の制御」を、社会科の教科特性に照らして具体化する。

3つの具体	社会科の教科特性に照らした3つの分類の具体	
<u>目標の達成</u>	忍耐力	：社会的事象についての問題を根気強く解決しようとする粘り強さ
	自己抑制	：社会的事象に対する自らの考えや根拠に固執し過ぎない気持ち
	目標への情熱	：自ら見いだした社会的事象に対する問題を解決したいと思う情熱
<u>他者との協働</u>	社交性	：社会的事象に対する他者の考えや根拠を伝えたい気持ちや、知りたい気持ち
	敬意	：社会的事象に対する他者の考えや根拠によさを感じる気持ち
	思いやり	：社会的事象に対する他者の解釈の違いを受容しようとする気持ち
<u>情動の制御</u>	自尊心	：社会的事象に対する自らの考えや根拠を貫こうとする気持ち
	楽観性	：社会的事象に対する自らの考えや根拠が他者と違っても、不安になり過ぎない気持ち
	自信	：社会的事象に対し自ら用意した資料や自らの考えや根拠が、価値のあるものだと思える前向きな気持ち

次に、課題となる姿の要因を考え、その要因と社会科の教科特性に照らした3つの分類の具体との関係を考える。

課題となる姿	その姿の要因
自らの考えや根拠を伝えることなく、他者の考えや根拠に納得してしまう姿が見られた。	・ <u>自らの考えや根拠を価値のあるものと捉えていないことが考えられる。</u> ・ 自ら、<u>自らの考えや根拠を伝えたい気持ちや、他者の考えや根拠を知りたい気持ちが弱いことが考えられる。</u>

本校社会科部では、この姿は、変革を起こされる子どもの姿であり、変革を起こす子どもの姿ではないと捉えた。非認知的能力との関係では、自信と社交性が発揮されていない姿と捉えた。

自らの考えや根拠を伝えることなく、他者の考えや根拠に納得してしまうことは、自らの考えや根拠が、価値のあるものと捉えられておらず自信が発揮されていない事が要因であると考えられる。他者に自らの考えや根拠を伝えることなく聞くだけにとどまってしまうことは、自らの考えや根拠を伝えたい気持ちが弱く、社交性が発揮されていないことが要因であると考えられる。社会科の教科特性に着目すると、幅広く事実を得たり、社会的事象の事実や考え、その根拠を比較・関連・総合したりして、自他の考えや根拠を質的に向上させることが大切である。そのために、自信と社交性を発揮しながら、社会的事象への理解を深めたり、自らの社会への関わり方を見いだしたりして、社会との関わり方を客観的な視点ももって捉えることが必要である。このことから、自信と社交性を発揮できるようにすることが大切だと考える。

そこで、本校社会科部では、重視する非認知的能力を自信と社交性とした。この非認知的能力が発揮された姿は以下のとおりである。

自信	：自ら調べた社会的事象の事実や考え、その根拠を拡大したり、丸で囲んだりして強調しながら伝えている姿
社交性	：他者が調べた社会的事象の事実や考え、その根拠について質問している姿

この姿の具体を段階的に捉えると以下ようになる。

	段階的に捉えた姿
	自信　：自ら調べた社会的事象の事実や考え、その根拠を拡大したり、丸で囲んだりして強調しながら伝えている姿 社交性：他者が調べた社会的事象の事実や考え、その根拠について質問している姿
	自信　：自ら調べた社会的事象の事実や考え、その根拠を指さしながら他者に伝えている姿 社交性：他者が調べた社会的事象の事実や考え、その根拠を覗き込みながら聞いている姿
	自信　：自ら調べた社会的事象の事実や考え、その根拠を他者に伝えている姿 社交性：他者が調べた社会的事象の事実や考え、その根拠を聞いている姿

(2) 学びのデザイン・学習指導の工夫

自信と社交性を高めるためには、以下のように、学びの枠組みを広げ、家庭と学校の学びをつなげる学びのデザインをすることが有効であると考えた。

過程	学習活動	学びのプロセス	学びのデザイン (※太字は新たな工夫に関わるもの)
つかむ	社会的事象への関わりを話し合う 学習問題をつかむ 予想をもち、学習計画を立てる	社会的事象に対して、もっと知りたいな。調べてみれば、疑問に感じたことを解決できそうだな。 【真正な学びの視点】 事前に調べておけば、分かることが増やせそうだな。 事前に考えておけば、しっかりと自分の考えをもてそうだな。 前やったとき、先生がヒントをくれて調べたり、考えたりしたことに自信をもてたな。 【個別最適な学びの視点】 【真正な学びの視点】	位置や空間的な広がり、時期や時間の経過、事象や人々の関係が伺える資料を用意し、子どもたちが、社会科の見方・考え方を働かせ、疑問や予想の根拠とできるようにする。 学習計画を立てた際に、子どもたちが学習計画に沿って、授業の事前に問題の解決に必要な社会的事象の事実を調べたり、自らの考えをもったりできるように、教師が個別シートを作成し、タブレットに送っておく。 ICTを活用して、そのシートをいつでも提出できる環境の設定をしておく。その際に、教師が個に応じた支援を行える余裕をもって提出期限を設定する。
追究する	予想の検証に向けて、調べる 社会的事象の特色や相互の関連、意味について話し合う ※学習計画に応じて点線内を繰り返す	授業の前に調べて（考えて）個別シートにまとめておいたから、自分なりによくできたと思うな。 【個別最適な学びの視点】 もっと、他のことも知りたいな。 友達はどんなことを調べて（考えて）きたのかな、聞いてみたいな。 【協働的な学びの視点】	子どもたちがICTを活用し提出したものに對して、個に応じた支援を行う。（子どもが調べた事実や考え、その根拠を称賛したり問いかけたりする。調べるための視点を提示する等。） 社会的事象に対して、子どもたちが調べて得た事実や考えのICTを活用した共有は、授業の際に開始する。
まとめる・生かす	学習問題の結論をまとめ、学習成果を振り返る よりよい社会に向けて、自らの関わり方を見いだす	自分と友達が調べてきたことや考えを協働シートと一緒にまとめたら、この社会的事象については、〇〇だと言えそうだね。 【協働的な学びの視点】	位置や空間的な広がり、時期や時間の経過、事象や人々の関係を視점에既知知識をまとめる、協働シートを用意する。 ※事前に調べたり、自分の考えをもったりする機会は毎時間ではない。

追究の過程では、授業内で扱う情報量が多く、子どもたちが、授業時間内で調べるだけでは、社会的事象の事実を十分に得られないことがある。そこで、学習計画を立てた際に、子どもたちに個別シートを配付したり、ICTを活用した提出先を示したりしておくことで、家庭と学校の学びをつなげるきっかけとする。そして、子どもたちが、学習計画を基に、興味・関心に応じて調べたい内容を決め、社会的事象に対する事実を授業の事前に調べたり、自らの考えをもったり、その根拠を用意したりする機会を意図的に設定する。まとめる・生かす過程では、授業の事前に自らの考えをもっておく機会を設定する。そして、社会的事象の事実や自らの考えを基に、それらを社会科の見方・考え方を働かせながらまとめることで、自他の考えや根拠を伝え合いながら、概念化したり新たな解釈を見いだしたりすることにつながる。このことにより、自らの考えや根拠を客観的な視点ももった上で、再度捉え直せるようになる。このように、基本的な社会科の問題解決的な学習のデザインに新たな工夫を加え、事前に子どもたちが興味・関心に応じて社会的事象を調べたり、自らの考えをもったりしておくことで、それらに価値を見だし、自信を発揮できる。また、調べた事実や考えのICTを活用した共有は、授業の際に開始することで、自ら調べた事実や考えと他者の調べた事実や考えとの共通点や相違点を知りたいという思いも高めていく。

このように、非認知的能力の自信と社交性の発揮を促すことは、社会科の本質的な意義である「社会生活における人の営みやその価値を認識し、それを基に社会に生きる多くの人々が公正で平和に生活できるような、自らと社会との関わり方を見いだす」ことにつながっていく。これらのことから、基本的な学びのデザインに、新たな工夫を加えて学習を進めることは、子どもたちの興味・関心等に応じて、学習の個性化を図りながら学習の深まりにつながる個別最適な学びであり、社会科の見方・考え方を働かせて学ぶ真正な学びと言える。

・学習指導の工夫

ICTを用いて、調べた事実や自らの考え、その根拠となる資料を事前に用意する機会の設定

「個別最適な学び」の視点から学習の個性化を図り、学習計画を基に、子どもたちの興味・関心に応じて、事前に社会的事象の事実を調べたり、自分の考えをもったり、その根拠となる資料を用意する機会を設定する。その際には、社会的事象の事実と自らの考え、その根拠となる資料を視覚化してまとめる個別シートを教師が配付しておく。このシートは、社会的事象の事実や考えをまとめる欄と、その根拠を貼付する欄を作っておく。このシートは、学習計画を立てた段階で子どもたちに配付しておき、子どもたちがいつでも活用できるようにしておく。そして、ICTを活用することで、いつでも、どこからでも提出ができる環境も整えておく。そして、子どもたちが調べた事実や考え、その根拠を事前に提出させておくことで、教師が子どもたちに、個に応じた支援を行うことができる。個に応じた支援とは、「子どもたちが調べた社会的事象の事実や考え、その根拠を称賛する」「調べたことの具体や根拠を問いかける」「調べる視点を問いかけたり、提示したりする」ことなどが考えられる。その方法は、子どもたちが提出した物にコメントを記述しICTを活用して返信したり、直接声がけをしたりするなど、子どもの実態に応じて変えるようにする。提出期限は、教師が個に応じた支援を行う時間を考慮し、実際の授業を行うよりも早く設定しておく。また、子どもたちが資料を用意する際には、子どもたち全員に同じ資料を配付したり、インターネットを使う際に気を付けるリテラシーについて説明したりするなど、発達段階に応じた資料の用意ができるようにする。

このように、空間的・時間的な制約を軽減し、子どもたちが、事前に社会的事象の事実を調べたり、自らの考えをもったりしておくことや、教師が個に応じた支援を行うことで、子どもたちは、調べた事実や考え、その根拠に価値を見だし、自信を発揮して授業に臨むことができる。

社会科の見方・考え方を働かせることを支援する協働シートの用意

子どもたちが、社会的事象の事実や自他の考え、その根拠を、社会科の見方・考え方を働かせて、ペアやグループで1枚にまとめる協働シートを用意する。例えば、位置や空間的な広がりや地図、時期や時間の経過は年表、事象や人々の相互の関係はベン図やクラゲチャートといった思考ツールなどを活用することが考えられる。また、その際には、教師がそれらを加工し、子どもたちに働かせたい見方・考え方が発揮されやすいシートを提示する。このシートを活用する目的意識をもっておけるように、学習計画を立てる際に、具体的知識を概念化することや、社会との関わり方を見いだすことなどを意識させておく。このことによって、学習内容をまとめる際には、自然と自他の考えや根拠を知る必要感が生まれるため、社交性の発揮を促すことができる。このように、子どもたちが、社会的事象の事実や自らの考え、その根拠を伝え合いながら、社会科の本質に迫っていく環境を生み出すことができる。

4 授業実践 3年「事こや事けんから防ぐ」

(1) 単元における学びのデザイン

子どもたちは、これまでに、3年「火さいから守る」の学習で火災から地域の安全を守る役割について、消防署や家庭で聞き取り調査を行ってきた。その過程で、消防署や消防団、地域の人々の取組や相互の連携・協力、それらの取組と自らの生活との関連を考えられるようになってきた。しかし、事故や事件から地域の安全を守る役割については、警察がいるから生活は守られていると考えており、警察と地域の人々が協力していることや事故や事件に遭わないために自らできる取組があることまで

考えが至っていない。このため、警察や地域の人々が協力して事故や事件への対応をしたり、防止に努めたりしていることへの理解や、事故や事件を防ぐために、自らできる取組について考える経験が乏しい。

このような子どもたちにとって、事故や事件から地域の安全を守るために警察や地域の役割を考えることは、自らの身の安全を守るためだけでなく、地域社会の一員として地域の安全を守るために自らできる取組を考え、行動する素地を育むことにつながる。そして、地域の安全を守るために警察や地域、自らの役割を考える際に、非認知的能力の自信と社交性を発揮していくことで、自らと社会との関わり方を客観的な視点ももった上で見いだすこととなる。そのため、事故や事件を防ぐために警察や地域の人々の役割や人々の工夫や努力を考察したり、自他の事故や事件に遭わないための取組を踏まえて、自らできる取組を選択・判断したりする力を身に付けることができると考えた。つまり、社会科を学ぶ本質的意義である「社会生活における人の営みやその価値を認識し、それを基に社会に生きる多くの人々が公正で平和に生活できるような、自らと社会との関わり方を見いだす」ことにつながると考え、次のように単元を構成した。

目標	警察や地域の役割とそこに従事する人々の工夫や努力を考え、それらが組織的・協力的に進められ、人々の安全な生活の維持と向上に役立っていることを理解する。	
評価 規準	(①知・技) 警察が地域の人々と協力して事故や事件の防止に努めていることや、安全に対する一人一人の意識を高めることにより、市民の安全な生活が維持・向上されることを理解している。 事故や事件から地域の安全を守る役割について、聞き取り調査をしたり、資料を活用して必要な情報を集めたりして、調べたことをまとめている。 (②思・判・表) 安全を守る仕事について、学習問題を見いだしたり、警察と地域の人々との関連や、それに従事する人々の働きを考えたりして、表現している。 (③主体的態度) 事故や事件から人々の安全を守る工夫や努力に関心をもち、予想や学習計画を考え、市民の一員として安全な生活をつくることに協力しようとしている。	
過程	時間	学習活動
つかむ	1	○これまでの生活経験、前橋市内の事故や事件の資料等から疑問点や調べたいことを考え、学習問題をつかむ。 学習問題 事故や事件が起こらないようにするために、誰がどのようなことをしているのだろう
	1	○警察や地域の人々の役割とそこに従事する人々や地域の人々の取組について予想し、調べる計画を立てる。 ＜調べる観点＞ ・警察の取組 ・地域の人々の取組 ・自らできる取組
追究する 事前	1	○警察の取組について聞き取り調査をする。（現場学習）
	1	○警察の取組について聞き取り調査を基に、警察の取組内容を話し合う。
	1	○地域の人々の取組を調べてきたことを基に、地域の人々の取組内容を話し合う。
	1	○事故や事件に遭わないために自らできる取組について調べる。
	1	○事故や事件に遭わないために自らできる取組内容を話し合う。
まとめる ・生かす	1	○学習問題の答えを出す。

なお、本単元において、子どもたちが社会的な見方・考え方を働かせながら、非認知的能力の自信と社交性を発揮できるようにする。そのために、自ら調べた事実や考え、その根拠となる資料に価値を見いだしたり、他者の調べた事実や考え、その根拠を知る必要感を高めたりできるように、本単元における学びのデザイン及び学習指導の工夫を次のように具体化して行った。

【学びのデザインの工夫の具体】

- ・学習計画を立てる際に、事前に自らできる事故や事件に遭わないための取組を調べ、自らの考えや、その根拠となる資料を用意できるように、調べた事実や考えと根拠となる資料を記入する個別シートを配付する。個別シートは学習計画を立てた際に配付することで、事前に家庭で自由に記入できるようにする。
- ・事故や事件に遭わないための自他の考えや根拠を比較したり、関連付けたりしてその考えや根拠の共通点や相互の関連を考えるために思考ツール（ベン図）を配付し、協働的にまとめる機会を設定する。

【学習指導の工夫の具体】

ICTを用いて、調べた事実や自らの考え、その根拠となる資料を事前に用意する機会の設定

- ・学習計画を立てた際に配付する個別シートは、事故や事件に遭わないための取組について調べた事実や考えを記入できる欄と、根拠となる資料を貼付できる欄を作る。また、自ら撮影した写真やインターネットで調べた資料等を貼付できるように、ロイロノートで配付する。
- ・個別シートを配付する際に、自らできる事故や事件に遭わないための取組の根拠となるように、小学生の主な交通事故の原因や群馬県の不審者による被害件数の資料も一緒に配付する。
- ・個別シートは、第6時の授業までに、いつでも提出できるように、提出箱を作っておく。
- ・授業までに子どもたちが提出した個別シートを、教師が事前に確認し、事故や事件に遭わないための取組について調べた事実や考えと根拠との関係性を問いかける。

社会科の見方・考え方を働かせることを支援する協働シートの用意

- ・事故に遭わないための取組と事件に遭わないための取組とを比較・関連付けたりしながら、共通点を見いだせるように、自ら調べた事故や事件に遭わないための取組を話し合う際に、思考ツール（ベン図）を活用する。

本単元において、段階的に捉えた重視する「非認知的能力を発揮した姿」の具体は、以下のとおりである。

重視する非認知的能力：自信と社交性

	段階的に捉えた姿
	自信 ：自ら調べた事故や事件に遭わない取組や考え、その根拠を拡大したり、丸で囲んだりして強調しながら伝えている姿 社交性 ：他者が調べた事故や事件に遭わない取組や考え、その根拠を質問している姿
	自信 ：自ら調べた事故や事件に遭わない取組や考え、その根拠を指さしながら他者に伝えている姿 社交性 ：他者が調べた事故や事件に遭わない取組や考え、その根拠をのぞき込みながら聞いている姿
	自信 ：自ら調べた事故や事件に遭わない取組や考え、その根拠を他者に伝えている姿 社交性 ：他者が調べた事故や事件に遭わない取組や考え、その根拠を聞いている姿

(2) 学びの実際 ※Gは抽出児、Cはその他の子ども、Tは教師、_____は自信、_____社交性を発揮した子どもの姿

【本研究以前における、重視する非認知的能力の側面から捉えた抽出児 G の実態】

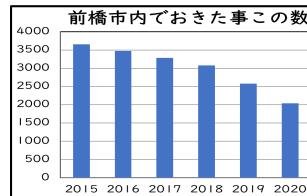
これまでの学習において G は、学習問題の解決に向けて、自らの関わり方を変容させながら社会的
事象と関わり、自らの考えや根拠をもつことができた。また、話し合う際には、他者の考えや根拠を
聞き、納得する姿が見られた。このような G は、本単元において、以下のように学びを進めていった。

【本単元における、子どもたちや抽出児 G の学び】

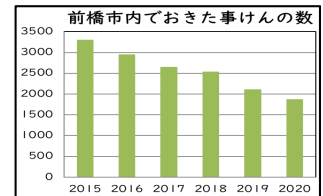
①「つかむ」の過程（第1～2時）

第1時、子どもたちは、生活経験や既有知識
を基に自分たちが知っている事故や事件につ
いて話し合った。子どもたちは、提示された 2015
年から 2020 年までに前橋市内で起きた事故と
事件の件数を示すグラフ（図2、図3）の資料
から事故や事件の件数や、その推移を読み取り、
「前橋市で、たくさん事故や事件が起きている
ね。」「事故も事件も減ってきているのはなぜか
な。誰かが何かをやってきているのかな。」と
発言した。それを受け、G は「事故や事件が減
ってきているのは、火事のとときと同じで、き
っと誰かが何かやってくれているのだと思うよ。
どんなことをしているのか調べてみたいな。」と
つぶやき、疑問や調べたいことをもった（図4）。

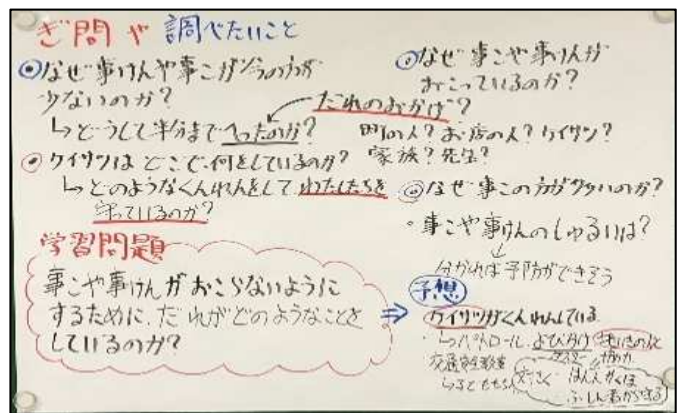
第2時、子どもたちは、学習問題を解決する
ために調べる観点と予想を考え、学習計画を立て
た（図5）。子どもたちは、提示された警察や
地域の人々が事故や事件を防ぐための取組の様
子や道路標識等の資料を読み取り、前時の疑問
や調べたいことを踏まえ、警察の取組と地域の
人々の取組を調べる観点として挙げた。また、
前単元「火さいから守る」の既習内容から、自
らできる取組の観点も挙げた。その後、それぞ
れの観点に対して、予想を立てている子どもた
ちの様子は以下のとおりである。



<図2 前橋市内でおきた事故の件数>



<図3 前橋市内でおきた事件の件数>



<図4 学習問題を立てる際の疑問や調べたいこと>

『前橋市で起きた事故や事件』		
名		
めあて 学習問題を解決するために学習計画を立てよう。		
学習問題 事故や事件がおこらないようにするためにだれがどのようなことをしているのか？		
調べる観点	予 想	調べる方法や調べるたいこと
けいさつ の 取組	・パトロール ・おひきり（おひきり） ・くんけん ・交通安全教室 ・事故がおこらないように見ているのか？ ・とじま（家の）	・けいさつの人とインタビュー ・本やインターネットで調べる ・けいさつのおまわり ・お家の人に聞く
けいさつ の 取組	・けいさつの人とインタビュー ・お家の人に聞く ・本やインターネットで調べる ・けいさつのおまわり ・お家の人に聞く	・けいさつの人とインタビュー ・お家の人に聞く ・本やインターネットで調べる ・けいさつのおまわり ・お家の人に聞く
自分 の 取組	・ケルンが場所を知っている ・いかにおまわりを守る ・交通安全ルールをおぼえる ・左右を見て渡る	・ケルンが場所を知っている ・いかにおまわりを守る ・交通安全ルールをおぼえる ・左右を見て渡る

<図5 学習計画表>

C1：警察の取組を調べるためには警察の人に聞くのがいいよね。

C2：確かにそうだね。消防署の取組も消防士の人に聞いたからね。

C1：地域の人はどうやって調べる。

C2：本やインターネットなどの資料から情報を集めればいいと思うよ。

C1：お家の人に聞くのもいいよね。

G：なるほどね。（しばらくして、思い出したかのように）火災から身を守るときにお家の
人に、家で取り組んでいる火災から身を守る取組を聞いてきたから、事故や事件を防ぐた
めに自分ができる取組は、今回もお家の人に聞いて考えたいな。

C2：(うなずきながら) そうだね。また、お家の人に聞いてみるのがよさそうだね。

G：早く知りたいから、事前にお家の人に聞いて調べてみよう。

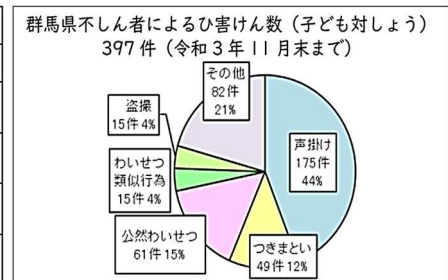
このようにGは、前単元の学習経験を踏まえ、家庭での情報収集を行いたいと伝えていた。そこで教師は、子どもたちが事前に事故や事件に遭わないための取組や考え、その根拠を記入できる個別シート(図6)をロイロノートで配付するとともに、いつでも学習シートを提出できるように、提出箱を作成した。また、自らできる事故や事件に遭わないための取組の根拠となるように、小学生の主な交通事故の原因(図7)や群馬県の不審者による被害件数(図8)の資料も配付した。

調べてわかったこと・自分の考え	根拠となる資料

<図6 個別シート>

小学生の主な交通事故の原因	
歩いているとき	自転車に乗っているとき
飛び出し	安全かくにんをしない
横だん歩道外での横だん	一時でい止むし
横だん歩道でのまきこみ	わき見運転
い反なし	い反なし

<図7 小学生の主な交通事故の原因>



<図8 群馬県不審者による被害件数>

②「追究する」の過程(第3時～第6時)

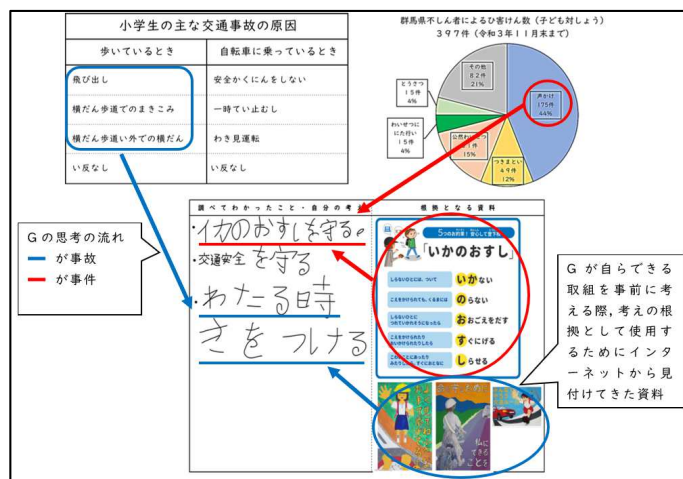
第3時、子どもたちは、前橋警察署の警察官から、その取組について聞き取り調査を行った。子どもたちは、提示された警察の取組を紹介している動画や資料から警察が取り組んでいる仕事やその目的を読み取りながら、警察にはパトロールや巡回連絡等をする仕事があり、それらは、人々の命・体・財産を守るために取り組んでいるという目的を真剣に聞き取っていた。

第4時、子どもたちは、警察官の話を基に、警察の取組を類型化し、まとめた。子どもたちは、第3時に警察官から聞いた警察の仕事や目的とパトロールや巡回連絡等、警察が活動している様子を示した資料とを関連付けて、「警察は、事故や事件が起こらないようにパトロールをしている。」「事故が起こったときに、聞き込み調査をしている。」と発言した。それを受けてGは、「警察官の人が命・体・財産を守るのがわたしたちの役割と言っていたし、どの取組もぼくたちの安全に関わるから、警察の取組には、ぼくたちの命・体・財産を守る役割があるのだね。」とつぶやき、「警察の取組は人の体・命・財産を守ることである」とまとめた。

第5時、子どもたちは、地域の人々の取組を調べ、その役割について考え、まとめた。子どもたちは、提示された地域の人々が事故や事件を防ぐために取り組んでいる様子の資料から登校時に旗振りをしたり、青色回転灯をつけた自動車でパトロールをしたりしていること等を読み取り、「登下校するときに旗振りをしたり、一緒に帰ってくれたりしている人がいるよ。」「青いランプをつけたパトカーみたいな車でパトロールをしている人がいるよ。なんだか警察みたいだね。」と発言をした。それを受けてGは、「地域の人々が警察と同じような取組をするのは、警察と協力をして、ぼくたちを守るためなのだね。」とつぶやいた。その後、Gは、それぞれの資料と登下校時に旗振りやパトロールをしている保護者を見たことがあるという自らの生活経験とを関連付け、「地域の人々は、警察と協力をしてぼくたちの命・体・財産を守っている」とまとめた。

第6時の事前、子どもたちは、第2時で学習計画を立てた際に配付された個別シートに、個別シートと同時に配付された小学生の主な交通事故の原因や群馬県の不審者による被害件数の資料を基に、自らできる事故や事件に遭わないための取組を家庭で調べ、まとめた。子どもたちは、配付された資料と家庭で調べた事故や事件に遭わないための取組や考え、その根拠とを関連付けて事故や事件に遭わないために自らできる取組を第6時が始まるまでに提出をした。Gは家庭での取組が学校のタブレ

ットに反映されている事を確認すると、その画面を教師に見せようとした。個別シートを見た教師が、個別シートに記述された内容について問いかけると、Gは、「いかのおすしを守るは、群馬県不審者による被害件数の資料の声かけが多いことと、自分で調べた、いかのおすしの資料とをつないで考えました」と説明しながら、その関係を線でつないだり、丸で囲んだりして、自らの思考の流れを視覚化し、個別シートにまとめた内容を更新し、再提出した（図9）。



＜図9 第6時の事前にGが提出した個別シートと思考の流れ＞

第6時、子どもたちは、事前に提出した個別シートを基に、自他の事故や事件に遭わないための取組や考え、その根拠を比較したり、関連付けたりしながら、提示されたベン図を取り入れた協働シートに、それらの共通点をまとめた。ペアで一枚の協働シートにまとめる活動をしている子どもたちの様子は以下のとおりである。

C1：事故に遭わないようにするためには、左右を見て道路を渡ることが大切だね（「左右を見て渡る」を書き込む）。

G：（相手のタブレットをのぞき込み、うなずきながら）そうだね。それ、ぼくも調べたよ。3年生の始めにやった交通安全教室でも教わったよね。つまり、事故に遭わないためには、交通ルールを守ることが大切だということかな。

C1：（うなずきながら）そうだと思うよ。事故に遭わないようにするためには、交通ルールをしっかりと守ることが大切だね（Gに自らの考えを伝えながら、協働シートに「交通ルールを守る」を書き込む）。



＜図10 個別シートを拡大しながら自らの考えとその根拠を伝える様子＞

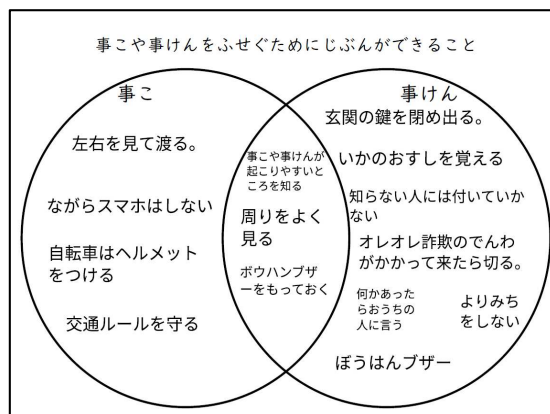
G：ぼくは事件に遭わないように、いかのおすしを覚えておくことが大切だと思ったから、いかのおすしの説明が書かれている資料も見付けてきたよ（個別シートを拡大しながらC1に見せ、自らの考えとその根拠を伝える）（図10）。

C1：いかのおすしのこと知っているよ。不審者の避難訓練のときに学習したよね（協働シートに「いかのおすしを覚える」を書き込む）。

G：避難訓練や登下校についての話の中で、子どもは大人の力には勝てないから、何かあったらお家の人や近くの人に助けを求めることも必要だと言っていたよ。

C1：（うなずきながら）確かにそうだったね（協働シートに「なにかあったらお家の人に言う」を書き込む）。

G：つまり、事故や事件を防ぐためには、何かが起きたときにすぐ対応できるように、周りを



＜図11 ペアでまとめた協働シート＞

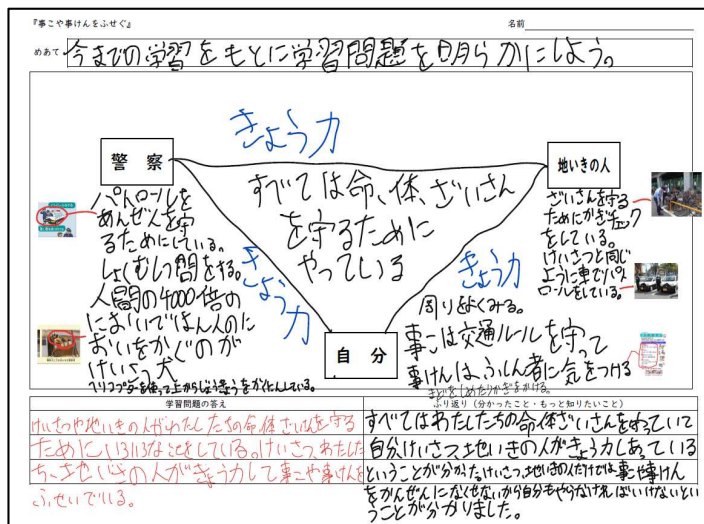
よく見ておくことが大切ということでもいいのかな。

C1：(うなずきながら) そうだと思うよ (協働シートに「周りをよく見る」を書き込む)。

このようにGは、自他の調べた事故や事件に遭わない取組や考え、その根拠を比較したり、関連付けたりして、事故や事件を防ぐためには、周りをよく見る等の考えを見いだすことができた。また、その考えを見いだすために、自ら調べた取組や考え、その根拠を相手に強調しながら伝えたり、他者が調べてきた取組や根拠について質問したりする姿が見られた。このGの姿は、重視する非認知的能力の自信と社交性を発揮した姿であった。

③「まとめる・生かす」の過程 (第7時)

第7時、子どもたちは、学習問題の答えを出すために、追究の過程で活用した学習プリントや学習シートを見返した。そして、事故や事件が起らないようにするために誰がどのようなことをしているのかについて、Gは、警察や地域の人々の取組と自らの取組とを関連付けて、警察や地域の人々と自分たちがそれぞれ協力し合うことで、わたしたちの命・体・財産を守っているとまとめた。また、振り返りでは、「警察と地域の人々だけでは事故や事件を完全になくせないから、自分もやらなければならないということが分かった。」と記述した。



<図1-2 Gが単元の最後にまとめた学習シート>

これまでの学習を通して、Gは、自ら調べた事故や事件に遭わないための取組や考え、その根拠を拡大したり、丸で囲んだりして強調しながら伝える姿が見られた。また、他者が調べた事故や事件に遭わないための取組や考え、その根拠について質問している姿も見られた。自他の事故や事件に遭わないための取組や考え、その根拠を伝え合いながら共通点をまとめる活動におけるGは、他者の事故に遭わないために道路を渡るときは左右をよく見るという考えと、自らの事件に遭わないために何かあったら周りの人に助けを求めるという考えとを関連付けて、事故や事件に遭わないためには周りをよく見るのが大切だという考えを見いだすことができた。また、その考えを基に、学習問題をまとめる際には、「警察と地域の人々に守ってもらうだけでなく、自らも事故や事件に合わないためにできる取組をしていかななくてはならない」と、自らの今後の過ごし方についても考えを見いだすことができた。このことから、Gは、社会科の見方・考え方を働かせ、社会科を学ぶ本質的意義である「社会生活における人の営みやその価値を認識し、それを基に社会に生きる多くの人々が公正で平和に生活できるような、自らと社会との関わり方を見いだす」ことができたと言える。

G以外にも、単元を通して、自信や社交性の非認知的能力を発揮した姿が見られた。自信が発揮された要因としては、学習計画を立てた際に個別シートを配付し、事前に事故や事件に遭わないための取組や考え、その根拠を家庭で調べられるようにしたこと、個別シートを事前に提出できるようにしたこと、教師が予め個別シートを確認し、子どもたちの考えを問いかけたことが考えられる。これらのことから、子どもたちは自ら調べた事実や考え、その根拠に自信をもって、授業に臨めた。社交性

が発揮された要因としては、自ら調べた事実や考え、その根拠に自信をもっているため、他者にそれらを伝えたいという気持ちが高まったことが考えられる。また、自他の調べた事実や考え、その根拠を話し合う際に、協働シート（ベン図）を配付し、事故に遭わないための取組と事件に遭わないための取組との共通点から、概念的知識を見いだせるようにしたことも有効であったと考えられる。

5 成果と課題

本校社会科における問題解決的な学習の中で、社会に変革を起こす子どもの育成に向けて、非認知的能力を高めるための学びのデザインについて研究を進めてきた。その結果、次のような成果と課題が明らかになった。

○成果

- ・ 事前に、子どもたちの興味・関心を基に、問題の解決に必要な社会的事象の事実を調べたり、自らの考えをもったりする機会の設定をしたことで、子どもたちが、自らの考えや根拠が価値のあるものだと思えられた。これは、非認知的能力の自信の発揮が促された結果だと捉えられる。
- ・ I C Tを活用し、事前に調べた社会的事象の事実や自らの考え、その根拠をまとめる個別シートを用意し配付しておいたことや、そのシートをいつでも提出できる環境を設定したことで、子どもたちが、自らの興味・関心に応じて発展的な学習に取り組みやすくなった。また、時間的な制約が軽減されたことで、個別最適な学びにつなげることができた。このことにより、自ら調べた社会的事象の事実や考え、その根拠を拡大したり、丸で囲んだりして強調しながら伝えている姿や、他者が調べた社会的事象の事実や考え、その根拠について質問している姿が見られた。これは、非認知的能力の自信と社交性が発揮された姿だと捉えられる。
- ・ 社会科の見方・考え方を働かせながらまとめる協働シートを用意したことで、子どもたちが、自信と社交性を発揮して、もち寄った社会的事象の事実や考え、その根拠を伝え合い、考えや根拠への解釈を広げる姿があった。この姿は、非認知的能力の自信と社交性を発揮したことによって、課題となる姿が改善され、「社会に変革を起こす子ども」の姿が現れたと捉えられる。

○課題

- ・ 非認知的能力の、自信の発揮が促された反面、他者の調べてきた社会的事象の事実や考え、その根拠を知りたいという思いが薄れてしまった子どもがいた。これは、事前に調べる内容や役割分担が明確にしきれなかったことが要因であると考えられる。これを解決し、さらに非認知的能力の発揮を促し、「社会に変革を起こす子ども」の姿が現れるようにするには、事前に調べてくる内容の差別化を明確にし、ジグソー法を用いることで、自他の社会的事象の事実や考え、その根拠を伝えたり聞いたりする必要感をより高めることに有効であると考えられる。そのためには、学習計画の立てた際の子どもたちへの視点のもたせ方や提示の仕方を工夫することが有効であると考えられる。

【参考文献】

- ・ 群馬県教育委員会『「I C Tを活用した群馬ならではの新しい学び」とは』、2021年。
- ・ 文部科学省『「個別最適な学びと共同的な学び」の一体的な充実』
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/senseioun/mext_01317.html
- ・ 芝池宗克、中西洋介『反転授業が変える教育の未来』、明石書店、2014年12月。